一般演題（ポスター）　妊娠期のケア2

座長：竹元　仁美（聖マリア学院大学看護学部看護学科　専攻科　大学院研究科 MCH 領域）

P-15
予期せぬ妊娠をし、産まなければならなくなった10代女性の妊娠期のプロセス

○久保田美雪[1)]　渡邊典子[1)]　小柳恭子[2)]
1）新潟青陵大学　2）とくなが女性クリニック

Ⅰ　緒言

新潟県の10代の出生数は増加傾向にあり、2010年の10代で出産した女性の年齢の内訳をみると16から18歳で約45％を占めており、学業の途中で妊娠・出産に至っていることが推測される。

私たちは、予期せぬ妊娠をし、産まなければならない状況となった中学生や高校生とその実母に継続的に関わった。実母は初診時、動転し、妊娠をなかったことにしたいという言動や態度がみられた。出産後、児は施設に預けることとなった。私たちは、実母の意向を尊重しながら出産まで母児の安全を最優先に関わった。その関わりを通し「親・家族への支援（家庭環境、親子関係）」「学業継続の難しさ」「医療従事者の役割（支援）」の3つの課題を明らかにした。その後も、クリニックには予期せぬ妊娠をし、産まなければならない状況となった10代の女性の受診が後を絶たない。

そこで、今回、10代の女性が予期せぬ妊娠をし、妊娠22週を超えても実母が妊娠に気付くまで放置していたのはどうしてなのか、その妊娠期のプロセスを明らかにする。

Ⅱ　方法

研究参加者は、10代で予期せぬ妊娠をし、出産に至った女性2名である。データ収集は、2013年3月～5月で半構造的面接を産後3～5か月の間に1回行った。逐語録に整理し、質的帰納的に分析した。研究参加者には、書面と口頭にて本研究の趣旨と目的、方法や倫理的配慮を説明し本研究への参加は自由意志であること、途中辞退が可能なことを保証した。また、プライバシー保護に努めた。なお、新潟青陵大学倫理審査委員会の承認を経て実施した。

Ⅲ　結果

妊娠期のプロセスとして、5つのカテゴリーを抽出した。以下、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは＜＞で示す。妊娠期のプロセス【妊娠を自覚し、実母の助けを待つ】には、＜中絶により子供が産めなくなるかもしれない強い恐れで身動きがとれない＞ことから＜両親が自分の妊娠に気付き、対処してくれると期待＞する一方で＜パートナーには頼れないと判断＞していた。【受診により、出産から逃れられないことを認識】には、＜産むしか選択肢がないと認識＞すると同時に＜中絶による子供が産めなくなるかもしれない恐れの消失＞があった。また、【行政の対応に実母とともに傷つく】には、＜さらしものになったと感じた行政の対応＞があった。さらに、【動転している実母への罪悪感から、自分にできることを見つける】には、＜罪悪感から両親に沿い従う＞や＜家族の日常を守るために、妊娠を隠すことに同意し従う＞中で＜人に見られないよう自分なりの出産準備を行う＞があった。そして、【今までとは違う日常生活の辛さ】には＜今までの学校生活・友人関係がなくなった辛さ＞や＜長期入院による制限された生活の辛さ＞＜パートナーおよび社会との隔離の辛さ＞があった。

Ⅳ　考察

研究参加者は、無月経、そして妊娠を自覚しながらも、中絶により次回妊娠できないかもしれない強い恐れから、自ら受診するという行動をとらず、実母が妊娠に気付くのを待っていた。そのことは、研究参加者にとって、妊娠22週を超え産まなければならない状況をもたらしていた。さらに、動転した実母の態度や言動は、対象者の罪悪感と実母に沿い従う（絶対的服従）ことにつながっていたと考える。そして、実母へ沿い従う妊娠生活は、様々な辛さを研究参加者へもたらしていたことが推察された。

Ⅴ　結論

研究参加者は、自らの対処行動をとれず、実母に全てを委ねており、キーパーソンは「実母」であった。このことから、実母の意向に沿い、実母との信頼関係を保ちながら、研究参加者が社会から遮断されることなく、妊娠期の辛さが少しでも軽減できるケアの必要性が示唆された。さらに、10代の子どもを持つ母親は、娘が妊娠する可能性を常に念頭におき、身体の変化に関心を持つことを初経教育や性教育の場等で保護者および学校関係者に発信していく必要がある。